

多武峯少將物語

もとよりかゝる御心ありけれど、父おとゝおはしけるほどは、せいし聞え給ひければ、えおぼし立たざりけれど、うせ給ひて後、はらはらの君達は皆ころとおはしませば、おとゝおはしまさねども、ことにものしき事もなし。この齋宮の宮の御腹のひめ君はまたともかくもなく、おとゝのかしづき給ひしにかゝりておはせしに、さもあらねば、唯この御せうとだちをむつまじきものに語らひ聞え給ひて、世の中の哀なる事をおぼし、を見奉り給ふを、片時見奉らではえおはしますまじけれど、もとよりかゝる御心ありけるうちに、御めのとおはしけれど、それもさとすみにて異なる事もなくて、萬の事心細く覺え給ふまゝに、唯この事のみ御心に急がれ給ひつゝ、出で給ふたびごとには、女君に、「法師になりて山へまかるぞ」と聞え給ひければ、「例の事」とたはぶれにおぼしてあむ聞え給ひける。「誠にこの度は」と聞え給ひければ、「例の夜ざりは歸り給へらむをこそは、法師かへるとは見め」と聞えて笑ひ給ひければ、「誠になり」と聞えて出で給ひければ、女君「法師にならむと侍るは、我を厭ひ給ふなめり」とて、

「あはれとも思はぬ山に君し入らばふもとの草のつゆとけぬべし」と聞え給へば、高光の少將の君、

「我が入らむ山の端になほかゝりなむ思ひないれそつゆも忘れじ」と申し給ひて、あゝみやの御許にまで給ひて、立ちながら「物聞えむ」とのたまひければ、「などえのほり給はぬ」と聞え給ひけれど、涙も出で給ひければ、「急ぎ物へ罷る」と聞え給ひて、異なる事も聞え給はで、出で給ひて比叡に登り給ひて、御弟のおはしけるむろにおはして、疾う禪師の君を召して「頭それ」とのたまひければ、いとあさましくて、禪師の君「などかくはのたまふ。御心かはりやし給へる」とてのたまふまゝに泣き給ふ。「それ」とのたまふ。阿闍梨も泣きて承らざりければ、御髻を手づからかうぞりしてきり給ひにければ、いかゞはせむとて猶ぞそり給ひける。禪師の君泣き惑ひ給ひけり。阿闍梨も、「いとあさましきわざかな。御はらからの君達もおのれをこそのがたまはめと、御せうそこをだにも聞えあへずなりぬ」と泣く。禪師の君「かうかうなむいと俄にあさましく」と京の殿ばらに聞え給ひければ、いみじうあさましがりのゝしりければ、うちにて聞しめし驚きてけり。御妹の君なども泣き惑ひ給ひけり。女房も泣きまどひて、物も覺え給はず、あさましきに、いさゝかなる物もまゐらで泣き給ひけり。宰相中將君を始め奉りて、驚きとぶらひ聞え給ふ。山に皆登り給ふとて、よなかにぞおはしける。「おはし給ひたりけり」と聞ゆる人ありければ、うち起き給ひて、見参らせ給ひてのたまふ、「哀なる名にはおふやと見つれどもかたちはことにあればかひなし。かたちも異になり給へりと聞けど、そのすぢにはあらねば、哀にもあらず」と聞え給ひけるを、その北の方見給ひて、

「逢ふことのかたちは異になれりとも心だに似ばあはれなりなむ」と聞え給ひければ、その御かへし、

「もとむともかひやなからむたぐひなく寡にありし君がこゝろに」とのたまひつゝ、折節ごとに泣き給ふを、うけ給はる人殊にあはれがる。さてかの桃園の姫君、少將の御袖に涙のかゝりぬれたりければ、

「ほのぼのとわけの衣をけさせ見れば草葉が袖はつゆのかゝれる」。佩きたまひしみはかしの、まぐらがみなるを見たまひても泣きたまふ。侍ふ人々上下「かの御身より涙の流れ出でぬる」と聞え給ひければ、姫君、

「津の國の堀江にふかく物思へば身よりぢみだもいづるなるらむ」。人々北の方に聞え給ひければ、あはれがり給ひて、

「ともすれば涙をながす君はなほ身をすみがまのゆこまも絶えせぬ」。又少將の常に見給ひし御鏡を、姫君見給ひて、「法師は鏡は見ぬか」とて皮敷の下に入れ給ふ。

「常に見し鏡の山はいかゝあるとかたちかはれるかげも見よかし」。山にもて参りたる御文に、いとあはれ多かる御かへりに、

「鏡山君がかげもやそひたると見ればかたちはことにぞありける」。たれたれも、かの姫君の御歎をあはれがり給ひけり。かくて、かの桃園の權中納言殿の中將の君参り、中宮よりはじめ奉りて驚きとぶらひ聞え給ふ中に、御めのとゝあい宮となじ、物も聞しめさず泣き感

ひ給ひける。かくいひて、いふかひなくて月比になりぬ。女君は尼になりなむと泣き給ひけり。愛宮の御もとになむ常に悲しき事をも通はし給ひける。「尼にはこゝにもとなむ思ふ給ふる。ひとたびになり給へ」と愛宮の、女君の御もとに聞え給ひければ「尼には誰もなるとも、同じ山には入らざらむこそかひなけれど、横川の麓までだにと思ふたまふるに、それもかたくや、かく聞ゆる、

いづくにもかくあさましきうきよかはあな覺束な誰に問はまし」と愛宮に聞え給ひければ、女君尼にと思ひ給へれば、

「山路ある鳥に我が身をなしてしが君かくこふと泣きて告ぐべく」。兵衛の佐の君にぞたうの少將君の御かはりに少將になり給ひて、よろこびに、この中納言殿に参り給へるを見給ひても、又せきやうがたき御けしきなり。中の君の少將は、山の君のかはりかとして、

「たがはずやおなじ三笠の山の井の水にも袖をぬらしつるかな」。北の方、

「違ふことすくなき身にはあはれなる三笠の君がかはりと思へば」。このいかを少將も思ひ出で給ひて、涙残さでぞおはしましける。「つかさも殊に嬉しからず」とぞのたまひける。「兄君のなりいで給はむまりに立ちて、ありかむとこそ思ひしか。よろこびにありかむ事の悲しき事」とのたまひけれど、いかゞはせむとぞありき給ひける。かくて近衛づかさの人來て歌ひのゝしれど、何の嬉しげもなくてまはたれ給ひける。

「名に立てる三笠の山に入り來ても涙のあめになほぬるゝかな」。かへしうけ給はる人の

聞えける。

「三笠山雨は漏らしをいにしへの君がかざしの露にぬるゝぞ」。桃園の中納言の君、まろがねの花がめを四つばかり作りて、その頃の花さして、山に奉り給ふとて、

「山の端はかくしもあらじ君がためみやこの花は折れば袖ひづ」。御かへり、

「我がために君が折りける花見れば住む山の端のつゆにそでぬる」。さてこの花など、君達皆聞え給ひて皆登りて見給ふ。念佛堂には、この瓶に花立てゝなむ行ひ給ひける。殿上の君まかじかと、入道の君にかたり給ふ。ある殿上人、

「水にすむものといふとも君ともにかめさへのぼるみ山なりけり」。同じ殿上人、

「横川てふ名には立てれど今よりはかめ山とこそいふべかりけれ」。また、

「哀なる君がよはひをゆづりてぞよかはにかめも立ちのぼりける」。かへし、せじの君、

「ひさしくも何かわが身をおもふべきかめの命は君にまかせむ」。三月ばかり鶯なきければ、北の方、

「我が身にも世をうぐひすとなき居れど君がみ山にえこそ通はぬ」。姉北の方の御かへし

以下客文
長崎殿文

とも、げに誰も同じやうに知り給はざらむをなむ、同じ浮世かはと思ふ給ふべき。憂からねばこそ登り坐すらめと、山にてもいふ事あらばとなむ聞えまほしきを、このかみもこの世を背きて、哀なる人の住み給ふらむ横川を渡りて、御影をだに見るまじくとも、猶背きても行

ひ侍らまほしきを、宮にもまかど又覺しめする。御供にもと参りき。妹を見ずばといふ事もなきにこそは。誠にや誰に問はましか。住み給ふ人にこそ問ひ聞えめ。憂からねばこそ、流れても君すむべしと水のうへにうきよがはとも誰か問ふべき」となむ聞え給ひける。常にこの二所、悲しう哀なることをなむ、聞えかはし給ひける。さて中納言殿の北の方、この君の御さうぞく袈裟より始めて、ひとくたりせさせ給ひて、これ山へ奉りければ山へ奉り給ふ。この御ぞどものいとあはれなれば、忘れては誰がことぞとおぼめかれつる。

「君が着しきぬにしあらねば墨染の覺束なさになきてたちつる」あはなは、

「奥山の苔のころもに比べ見よいづれかつゆのおきはまさると（風）なむ聞え給ひける。上の御ぞよりはじめて墨染なり。唯あはせの御袴ぞかいねりなりける。山の御かへり、「山伏は苔の衣などのみこそ身には添ひたれ。これは身にもあはぬ物どもなれど、御志あるものどもにてなむ給はりぬる。昔の着物にもあらねばやおぼめいたまひつらむ。今よりならひ給へかし。ついてもことびとのころもがへやえ給ふらむ。あたらしく袖ぬれぬ。脱ぎ給は、もとの色忘れ給ひなむ。まことや墨染のきぬ着給ふあればにや、いといぬれまさりてなむ。

侘びぬれば雲のよそにぞ墨染のころもの裾ぞつゆけかりける。

露霜はあしたゆふべにおく山の苔のころもは風もとまらず」となむありける。更に「京に出で」とぞのたまひける。これをこの姫君、愛宮覺束なかり給ふ。あにおと、行ひなむよくよくし給ひける。母君父おとをなむ、いといとよく戀ひ奉り給ひける。あい宮の御もと

に、桃園の大姫君の奉れ給ひける、

「物思ひのやむ世もなくて程経れば忘るゝことも^{元知}まひのわかきか。太刀佩きたるを見れば、繪に書きたるさへなむ悲しう侍りける。今日の御かたちは知らず。昔のみ面影には見え給ふ。そこにはいかゝとなむ聞え侍る。つれづれの御住居なればにこそ思ひ捨てられけれ。忍草うとからずや御覽すらむ。こゝにも、

一人のみながひる宿のつまごにまのぶの草を生ひまさりける」。「うけ給はりぬ。これよりも聞えむと思ふ給ふれど、袖ぬらすながめに、明し暮すほどに怠り侍りにける。盡きせぬ物おもひはいつはてなむと、親たちに後れ奉りたるに、ましてかゝる物思の添ひて侍ればおぼしやれ。蓬の繁き宿に立ち寄り給ひて、哀とのたまひし御姿の見えねば、月日のふるまゝにいと哀に侍る。かたち異になり給へつらむ。御姿を時々見え給はり、慰む世を妬しとのたまふなるこそいと覺束なけれ。忍草はこゝにもや、

茂りますまのぶのうへにおきそふる我が身一つは露のほどにぞ。思ひ消えなで生きて」となむありける。さてこの姫君に、早うより心かけ聞えたりし人もとぶらひけり。それが聞え給ふ「などかこの君を山に入り給ふべく、見給ひぬべき事はあらせ奉り給ひし。まろこそ昔山すみはせむと思ひしか。人に物思はせ給へりしむくいとおぼしめせよ。まめやかに山に住み給ふよりも、とまりて獨寝し給ふころ、いかにねぶたからずおぼすらむと、思ひ奉りて、聲高くあはれといはゞ山びこのあひ答へずばあらじとぞおもふ」。又ついでとて返りて

とし給はず。悲しさぞまさりける。またほどへて、

「大和なるみゝなし山のやまびこは呼べどもさらすあひも答へず。答も取り入るゝ人を見まはし」とて泣い給ふ。京の殿より御文に「この頃はいかにおぼすらむ。こゝには心ほそきを、いと哀になむ。こゝにはこの月涙留めず、そこにはおぼすらむを思ひ奉りて、尼にならむとさへのたまふなる。常は世の中にさぞおぼすらむ。こゝにぞ浮世をば背きはてなむ。いざや世の中にないしのかみのぬしといふなれば、頭おろしてはかうぶり取られなむと、人のものすればなむ、いさゝかうしろ残して侍る。さうじをさへゑたまふなれば、若き人だに深く物をおぼすなれば、こゝにはまして水風のいもひをせましとなむ。尼にても浮世をば離れずや、猶まかなおぼしそ。

船ながす程二許

久しといふなるをあまとなりてもながめかるてふ」と聞え給ひける。御返し「畏まりてうけ給はりぬ。いと嬉しう常に間はせ給へるをなむ、自ら申さまほしう思う給ふれど、此の頃みだり心ち例よりもまさりて、怪しう侍りてなむながめはべる。

疊とても身をし隠さぬものなればわれからとてもうきめかるなりとうけ給はれば、思ひも定めず」と聞え給へり。たま右衛門佐中納言殿に傳へ給へりけるついでに、大姫君の御方に傳へ給へりけり、

「忘れてもうれしかりける君かとてたそがれ時は惑はれどする」。晝ねして起き給へりける程なりけり。衛門のすけ「立ちながら聞え侍る。怪しけれども、急ぎてうちへ参り侍ればな

む。いかにともえまばしばも聞え侍らず」とて、「いかに世の中の大刀佩きたるさまをも見給へ」とてなむ聞え給へる。御返し「いと嬉しうたちより給へるを、急ぎ給へばなむ。姿はたそがれ時に覺束なくなむ。こゝには其にほも哀になむ。つれづれのながめに住ひさへ代りたれば、あの人の影も見えねば心細きを問はせ給へる」（原）なむ聞え給へば「さらば靜に參らむ。太刀佩きたる姿も見給はむとあらば、えりくゝつにても侍はむ」とて出で給ひぬ。宮のこのかみの殿にて、人たまへる序に、ようさりつ方、月のほのかなるに立ち寄り給へり。昔きくやどのありしえにいかにぞや、山人は忍びてをり給ふやあいなく（化）。

「あしびきの山より出でむ山彦のそま山水におとまさらなむ」と聞え給へれば、いと嬉しく立ち寄りて問はせ給へるを「始は嬉しかりつれども、後の御詞にさしあやまちて、いとしくさまも見えて」とて、歌のかへしは聞え給はず。さかしらのやうに人もこそ聞けど、このきんだちはまばしばこそ哀がり給ひしか。愛宮ぞおぼしやむことなかりける。かくて愛宮の御許より聞え給ひける、

「なぞもかく生ける世を経て物思ひをするがの富士の烟たえせぬ。あはれあはれそにもしかにとなむ思ひ聞ゆる。夢にも山の君の見え給ふをりは、覺めて悔しくなむ」と聞え奉らるれば、御かへし、

「物おもひは我もさこそはするがなる田子の浦浪たちやまらずして」となむ。誰も誰も御はらからの君達、この愛宮の泣き悲しび給ふを聞き給ひて、あはれがり聞え給ふものを、聞え

ておはしけるとさく。故式部卿の北の方は、時々とぶらひ聞え給ひける。四月ばかりに卯の花につけて、

「君のみか我もさこそは世の中をわなうの花となくほとゝぎす」かへし、

「卯の花の咲ける垣根にほとゝぎす我はまさりてなくとゑらなむ」。又式部卿の北の方もその殿に聞え給ふ。「猶思ふ思ふともあさまし。山よりもいかに盡させずおぼすらむ。夢もあらば、

あはれなること語らひて時鳥もろゑゑにこそあかまほしけれ」と。御かへり「畏まりてあむ。いともいともうれしく、かく常にとはせ給ふことなむ、盡させぬ事には。いでやいでやすべてすべて、唯推し量らでまことや。

かたらはぬささより鳴きつ時鳥ものゝあはれを知れりと思へば」。かくて按察使の大納言殿の北の方、愛宮の御もとに「此の頃はいかゞ怪しう、物騒がしく思ふ給へられてなむ暫しも聞えぬ。あはれ世の中をいかに眺め給ふらむ。こなたにもなか渡り給はぬ。山よりはとぶらひ聞え給ふや。さもこそは世は背き給はめ。忍びても出で、おはんもとには語らひ聞え給へかし。女の通ふ所ならばさて通はまほしくなむ思へど、今こそあはれなれ。いかにそこにも世の中心にかなはぬ折は山へ入りぬべき折あれど、えや世の中を背く。まがまがしく尼にならむとのたまふなる。まことか。ゆめゆめまかなおぼしそ。

恨みこしそむかまほしき世なりともみるめかづかぬあまになるなよ」。愛宮の御返し、

「いとうれしう問はせ給へるなむつれづれなるに。これよりこそ聞えまほしけれど、常にさわがしうおはしますらむに。とぶらはせ給ふを喜びて、そなたにも参らまほしきを、あけくれのながめに袖ひぢつゝ物思はぬになむ。山より時々おとづれ給ふ。かしらそり給へらむすがたのみ見給へまほしきに、見え給はぬがうき世の中にかへらじとにやあらむと、尼にはさもやと思ふ給ふれども、さても猶世の中にこそ思ひかへりこめと思ふ給ふれば、まだ思ひたゝずなむ。

あまならでそれにも鹽はたれどもうきめかづくと又やなるべき。

麟蹄世には知りて山路にまどふこゝろも。弟せじの君、

「出でゝこし人の家路もおもほえずわがみ山こそ住みよかりけれ」。かくて、愛宮の御もとに右衛門のすけおはして、少將の君おはしつるやう語り聞え給へば、「我ばかりうき身はなし。男はおはし通ひたぶと、

山の井の麓に出でゝ流れなむてひしき人のかけをだに見む」とのたまへば、佐の君の御がへし、

「君がすむ山がは水のあさましくうき世の中に流れいでにし。桃園の殊に聞ゆるに、おとゝ君常におはしてあはれがり給ふ、御文にてもありけり。姫君なほ「世の中こゝろうし。尼になりなむ」とのたまふを聞きて、少將の君、

「あまにてもおなじ山にはえしもあらじ猶世の中を恨みてぞへむ」。かへし

「袖の浦に身をうしはやくあまなればみるめかつかであらむものかは」。さてこのひめ君「山の君の行ひ給ふらむ。われいをくはむこそゆゝしけれ」とて御さうじをぞ猶玄給ひける。山の君聞しめして哀とおぼして、こゝかしこよりをかしきさうじ物參らせたるをば、時々奉れる袋に貝に生ひたるめを始めて入れたり。又うつきつごもりばかりに、鶯の巢みつばかりうめずちばかり入れたり。

「たのみなくはかなく見ゆる我ゆゑに君がながめを思ひやるかな。あはれあはれ」と聞ゆる。「かひなくおぼすな。まことやさうじ玄給ふなれば、まほうら越えぬ山なれど、志ありておひ出でたるめぞや」とあり。「鶯のあらずちにかくぞせむ」とあり。

「我がすみか君はゆかしくおもほえばあな鶯の巢のうちを見よ」。かへし、「戀ひてねし君なきとこのいは浪にこゝのながめに袖のぬれぬる。忍び聞ゆるか。ひもありけるかな。」

鶯の巢のうち見てもねをぞ鳴く君がすみかはこれかと思へば。さつき朔日に、御はらからの君達わりを具しておはしたりけるに、雨の降りたりければ、いしを君、

「かゝりてふよかはともへとさみだれていと涙に水まさりぬる」。少納言、

「君がすみよかはの水やまざるらむ涙のあめのやむよなければ」。右衛門の佐、

「草ふかき山路をわけてとふ人をあはれと思へどあとふりにけり」。宮権亮、

「いづくへも雨のうちよりはなれなば横川にすめば袖ぞぬれます」となむ。富小路の君達

わりをしのいで給へり。六郎君の聞え給ふ「世の中心うければおのれこそ頭そらむ。山へ入らむと思ふ給へしかど、おとゝの君のかくし給はでうせ給ひにしかば、罪深くなると思ふ給へて、思はぬ山々にありくこと今に思ひ侍れど、君のおはすれば、御弟子にもやなりなましと思ふ給ふる」とのたまへば、せじの君「弟子まさりにこそあなれ」と聞え給へば、六郎君「弟子まさりとおぼさば、これより深からむ山にこそ入り侍らめ。いづくならむ」とて六郎君、

「都へもさらにかへらじわがごとく罪ふかき山いづこなるらむ。せじの君の御かへし、
「これよりも深き山邊に君入らばあさましからむ山川の水」。四郎君、

「君をなほうらやましとぞ思ふらむおもはぬ山にこゝろいるめり」。七郎君、せじの君に聞え給ふ。

「君がすむ山路につゆやまげるらむ分けつる人のそでのぬれぬる」。御かへし、

「苔のきぬ身さへそはればそぼちぬる君は袖こそつゆにぬるなれ」。おとゝせじの君、

「むかしより山水にこそ袖ひづれ君がぬるらむつゆはものかは」。かくてこの入道の君、御夢におとゝの君出家し給へりし御姿にて、この横川におはしまして泣きて聞え給ひける。「何を憂しとてかくはなり給ひしにか」、たふとさはいとたふとけれど、いと悲しくなむ哀に聞ひ聞え給へば、「それに助かる事もあり。さはあれど、いと口惜しくなむある」などのたまへば、なくなく聞え給ふ、「いと哀なる住ひま給ひけるを、あまかけりても尋ねとぶらはむ。

かゝりとならば世に立ち給ふな」とて、

「君がすむ横川の水しにござらずば我がなきたまは常に見せてむ」。御返り事、

「いといしく袖ぞひぢぬる横川には君がかげ見ば水もにござじ」と聞え給ふほどに、やがて覺め給ひぬ。こひ誓ひ給ひて、御おと^{との}君に語らひ聞えたまひてかく泣き給ふ。さてかの入道の君の御子は、太刀はき給へる人を見給ひては「てゝぎみか」とのたまふに「あらず」とのたまへば「母君こそ、てゝきにはあらず。などかてゝきの久しく見えざらむ」とて泣き給へば、姫君よゝと泣き給ふ。御ぐしかき撫で、「君は山にぞおはする」とて泣き給ふを、おほぢ君見給ひてのたまふ、

「あしびきの山なる親をこひてなく鶴の子見れば我をかなしき」。北の方、

「ひえに住むおや戀ひてなく子鶴ゆゑ我がなみだこそ川とながるれ」。母君、

「澤水にたつかげだにも見えよかしこゝら子鶴の鳴きてこふるに」とて泣き給ふ。かくて哀なる事がちになむありける。太刀佩きたる人見ても「こはやてゝきなどはゝきのもとにおはせぬ。我を抱き給はぬ」とて歎き給へば、母君、

「逢ふことの難さも知らずうちになくひな鶴見るぞ悲しかりける」。北の方、

「逢ふことの難くとてだになくさまでわらは泣きにぞ我もなかるゝ」。おほぢ君、

「かたにても親に似たらばこひなきに泣くを見るにぞ我も悲しき」。さてこの姫君、身をや投げてましとおぼせど、きん達のおはしければ、我なくてはいかいせむとおぼして山に聞

え給ふ。「世を遁れだになくはいかゞせむと思ふに、少し露の命をもとめいづる、

君やうゑし

われやおほし、

なでしこの

ふた葉みつばに

生ひたるを

かせにあてじと

おもひつゝ

はなのさかりに

なるまで

争でおほさむと

おもへども

つゆのいのちや

あへざらむ

いまもけぬべき

こゝちのみ

つねにみだるゝ

たまのをも

絶えぬばかりぞ

おもほゆる

ものゝかすにも

あらぬ身を

たゞひとへにて

あさましく

あまたのことを

思ひ出でゝ

きみをのみ世に

まのぶくさ

やまにまげくぞ

おいの世に

こひてふことも

知らぬ身も

まのぶくさ

うちはへて

来てぬしひとも

なきとこの

まのぶくさ

おもほしき

ことかたらはむ

ほとゝぎす

来ても鳴かなむ

世をうしと

きみが入りにし

やまがはの

みづのながれて

おとにだに

聞かまほしきを

ほだされて

世にすみのえの

みつのはに

むすべることの

なかりせば

つねにおもひを

たきものゝ

ひとりひとりも

もえいでなまし」。

山の御かへし、

「もろともに

なでゝおほしゝ

なでしこの

露にもあてじと

おもひしを

あなおぼつかな

目に見えぬ

はなのかせにや

當るらむと

おもへばいとぞ

あはれなる

今も見てしがと

おもひつゝ

ぬる夜のゆめに

見ゆやとて

うちまどろめど

見えぬかな

目のうつゝまに

かぎりなく

こひしきをりは

おもかげに

見えてもこゝろ

なぐさみぬ

かたみにさこそ

みやこをば

おもひわするゝ

時やはある

はるけきやまに

すまへども

つかまわすれず

おもひやる

くもゐながらも

あしがきの

間ぢかゝりしに

おとらずぞ

あはれあはれと

まこもかる

よとともにくそ

しのびぐさ

わがみやまにも

ふもとまで

おふとまらなむ

まらかはの

ふちも知らずは

ひたぶるに

きみがたにのみ

うきよかは

うれしき瀬をぞ

ながれては見む」

となむありける。又按察使殿より、桃園の北の方の御許に、近江の北の方の御文、「いかに世の中をおぼしめしますすらむに、幼き君達を見奉り給ふに、悲しくおぼすらむ。されど山にだにおぼしめせば、たのもしくおぼしめすらむ。こゝにこそ、人數に侍らねど父なし子をもてわづらひぬれ。それは世の中を何とも思はむ。まづかの山の御住ひの哀なるをなむ、里へ出で給ふまじとあるはまことか。されども御命だにおはせば、

あしびきの山に年へひとおもへども都こひしくならばいでなむ。譬ふべきことにはあらねど、死出の山入りにし翁どもの、年を経れど逢ふ事なく侍ればいみじく」とあり。北の方、姫君にかくなむと聞え給へれば、姫君の御かへり聞え給ふ。

「都をばいとひて山に入りぬれど戀しからねばおもひいでじを。道にわすれ草こそ生ひたらめ」となむ。このせじの君の御はらからの君達、山は夏とも寒かなるを綿物奉入し元給給ふ。中宮より胡桃の色の御直垂、くちなし染の袷一襲、ふるきの皮のおほんぞ、青鈍の指貫、袷の袴奉れ給へる御歌、

「夏なれど山はさむしといふなればこの皮衣ぞ風はふせがむとてなむ奉る」とある。御かへし、

「山風もふせぎとめつるかはぎぬのうれしきたびに袖ぞぬれぬる」。大納言殿の北の方の方たてまつれ給ふ。いとも清げなるつむぎを青色に染めて、山吹色の袷一襲、青鈍の綾の指貫、袷の袴一襲奉れたまふ。添へられたる歌、

「君がためたちぬひたれば露ぞそふみやこの人の苦のきぬには」。かへし、

「そはりける露も絶えせぬ苦のきぬいと涙にぬれまさるかな」。式部卿の北の方一人おはすれば異なる事おはせねど、人の物し給ふに思ひまゐりてもあらねど、ふすま奉りたまふ。

「露のこよひあかつきにおくなれば夜の寒さにふすまかさねむ」。御へかし、

「夜とてもうちふすまなき山ぶしはころもさだめず今よりぞまゑ」。かくてこの中宮にお

はしますを、皆人御ぞ奉れ給ふ。「必ず我も奉らむ」とのたまひければ、きさいの宮「我と具して奉らむ」とて青鈍の袷一襲、おなじ色の袴一襲なむ奉れたまひける。

「君がかげ見えもやするところも川浪たちるるに袖ぞぬれぬる」。かへし、

「わがために浪のぬひける衣川きてだになれむ年をわたりて」。愛宮「われ何わざをせむ」とて、きさいの御帷子一襲、布のけうらなると、御湯殿あるかるらむにとて、

「君がためなく縫へば世の中に涙もかゝるころもたちけり。御をい袖てあはれや、これよりこそやますげのやうなりとも、御ぞは奉れまほしけれ。ゆかたびら、たゞのといかにせさせ給へらむと、あはれあはれと見たまふるに、

袂よりぬれけむ袖もまだひぬに身にもまみぬる唐ころもかな。わが北の方には、逢ふことのかたみとてこそ見奉れ」となむ聞え給へりける。いみじうあはれとなむ。ことよりも愛宮の奉れ給へるをとりわきて泣き給ひける。すべて言ひ盡すべくもないうみじうあはれになむ。

多武峯少將物語 終